

## 「広島生卒業30周年記念祝賀会」について

総合科学部 稲田 勝彦

広島大学の卒業生が、毎年、卒業30周年を記念して祝賀会を開いていることをご存じであろうか。今年は、第8回生にとって卒業30周年目にあたり、筆者もその一人として、今年の夏、「広島大学第8回生卒業30周年記念祝賀会」の世話人を務めたので、その趣旨と経過をご報告し、あとに続く方々のご参考に供したいと思う。

この祝賀会は、その年に卒業30周年を迎える本学の卒業生が、8月中旬の土曜日あるいは日曜日の午後に、広島市内のホテルに会して祝賀の宴を持ち、旧交を温めるとともに、来賓としてご臨席いただいた広島大学長、部局長および各同窓会長の祝辞をとおして、広島大学の現状に触れるというものである。また、この会の前後にクラス会を開くグループも多く、クラスメートが久しぶりに再会できる絶好の機会を提供する場ともなっている。

今年は第8回生にとって卒業30周年であったわけだが、この第何回生という呼称には多少説明があるようだ。新制広島大学の発足は昭和24年であったから、第8回生とは昭和31年入学、同35年春卒業の者と考えればよいわけだが、実際には、当時の教育学部・東雲分校および三原分校の2年課程修了者の卒業年は昭和33年、政経学部第Ⅱ部生は36年、医学部生は37年であった。つまり、昭和31年入学生のすべてにとって今年が「卒業30周年」にあたるわけではなく、また、すべてが「第8回生」でもないのだが、便宜上、昭和31年入学生を第8回生とみなすのである。そして、これら第8回生の卒業生総数は約1,200名であった。

祝賀会そのものは半日の行事だが、そこに至るまでにはそれなりの準備がある。まず、今年の春、第8回生のうち広大に奉職する教職員によって発起人会が結成され、ついで各学部・学科の代表者からなる総勢20数名の実行委員会が組織された。この実行委員会が何度か会合を重ね、この事業の諸計画の立案、名簿の整備、案内状等の作成、印刷、発送などさまざまな準備にたずさわった。祝賀会当日には、委員が司会その他の役を分担するなど、正直言って、実行委員の苦勞は相当なものであった。しかし、それぞれ社会の第一線で活躍している同期の友が語り、歌い、喜ぶ姿を見たあとはそんな苦勞も吹き飛んでしまったことは言うまでもない。また、会計的にも20余万円の剰余金を得て、慣例に従い、広島大学に寄附することができたのも幸いであった。

このような「30周年祝賀会」行事は今後ともぜひ続けてもらいたいと思っている。たしかに、はじめの頃は数百人もあったという参加者が、昨年は約140名、今年は100余名と、年々減ってきているのは事実だ。これを卒業生の同窓意識の低下だとみる見方もあるが、むしろ世話人の努力と工夫次第で何とかなるものだと思いたい。来年、平成3年春卒業の第39回生が同じように卒業30周年を祝うとすれば、西暦2021年となる。その時、3,000名近い卒業生が母校を懐かしく思い、この祝賀会に出席しようという気持になるかならないかは、在学中に広大生としての誇りを持てるような生活を送ったか否かにかかっていると思うのだがどうであろう。